

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：33925

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23055

研究課題名（和文）古英語から中英語にかけての語順の変容に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study of diachronic change in word order from Old English to Middle English

研究代表者

高橋 佑宜 (Takahashi, Yuki)

名古屋外国語大学・外国語学部・講師

研究者番号：90844283

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、英語史における語順の変化について、特に、古英語期から中英語期に着目し、その過程や要因について実証的な立場から考察した。研究目的としていた現代英語のより深い理解に資することや英語教育分野に対する波及効果をもたらすことに注力した。その成果として教育文法として知られている「意味順」を用いて通時的な倒置語順の発達過程に関する分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、近年、英語史分野と英語教育分野の接点に対する関心が様々な層において高まっていることを念頭に、英語史分野における研究成果を現代英語の学習や教授にどのように活かせるのかという観点から研究を進めた点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research project focused on the diachronic changes in word order in the history of the English language from Old English to Middle English. This study examined the processes and factors of the change in word order. The research project was particularly committed to provide a deeper understanding of Present-day English and contribute to the field of English Language Teaching. Towards this purpose, this study diachronically analyzed the inverted word order patterns by using the MAP Grammar.

研究分野：英語学

キーワード：英語史 古英語 中英語 言語変化 意味順

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現代英語の基本語順は SVO (主語-動詞-目的語) をしていた一方で、古英語は SVO 型語順と SOV (主語-目的語-動詞) 型語順いずれの性質も備えていた。古英語から中英語の間に、英語は SVO 型言語への類型論的な変化が進行し、現代英語の語順は近代英語期に入るまでにはその原型がほぼ形作られた。英語史上における語順変化の要因を巡っては、外面史としては古ノルド語やフランス語との言語接触、内面史としては格変化語尾の消失が挙げられている。しかし、近年、統語論と情報構造理論の視点から語順変化の理論化と精緻化が推し進められている (引用文献①、②、③、④)。また、それと並行して、歴史語用論 (引用文献⑤) が言語変化を捉える経験主義的な基盤として注目されつつある。同時に、経験主義的な基盤に対して、説明妥当性を与えるコーパス言語学的手法が英語史分野においても定着して久しい。そこで、本研究はこうした近年確立してきた方法論を援用し、英語史上における語順変化を引き起こした要因を実証的に明らかにすることを旨とした。

2. 研究の目的

本研究は、古英語から中英語の間に起きた語順の通時的変化のプロセスとメカニズムを明らかにすることを目的とした。このために、英語の通時的言語変化の分析モデルを構築することを目指した。本研究を遂行することで、以下の目的を達成することが期待されていた。まず、古英語から中英語にかけての語順変化のメカニズムを詳細に明らかにすることを目指した。次に、過去の言語事実の分析を踏まえて、現代英語の成立に関わるより深い知見を得ることを目指した。そして、前述の成果を基に、英語教育学や教育言語学といった隣接分野に対して有益な知見を提供することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、実証的な立場から行う。具体的な手法としては、従来の文献学的な手法を継承しつつ、言語変化に対する新たなアプローチを提供しつつある歴史語用論の知見に基づいて研究を実施した。

4. 研究成果

期間中に行った研究成果として、分担執筆の図書を1件発表した。以下の(1)において、その研究成果の内容を概説する。また、以下の(2)において、2021年3月に出版が予定されていたが刊行予定に遅れが生じている単著論文1件について言及する。

(1) 著書1は、研究の目的において述べた英語史と英語教育の接点という観点から、教育文法として知られている「意味順」(引用文献⑥)を用いて通時的な倒置語順の発達過程の分析を行った研究報告である。「意味順」は、現代英語の語順が「だれが」「する(です)」「だれ・なに」「どこ」「いつ」という「意味のまとまりの順序」として並べられる点に着目した文法であり、SVO型言語である現代英語の実践的な運用を容易にするための教育文法として位置付けられている。著書1ではまず、近年、英語史と英語教育の接点に対する関心が様々な層において高まっていることを指摘した上で、英語史における研究成果を隣接分野に還元するためには、現代英語の学習や教授にどのように活かせるのかといった点に注目する必要があると主張した。そこで、当初の計画では予定していなかったことではあるが、「意味順」の理論的枠組みを活用して英語の通時的な分析することを通じて、「意味順」の理論的な基盤を検証し、通時的な応用の可能性を考察した。

具体的には、倒置語順に焦点を絞り、通時的な語順の発達を「意味順」を用いて可視化した。倒置語順は、古英語期や中英語期においては一般的だったものの時代を経るにつれて衰退し、倒置語順が用いられる環境は次第に限定されてきたという背景がある。英語における倒置語順の衰退は語順変化と密接に関係していることから、倒置語順を分析することで語順の通時的な変化を概観することができるためである。また、現代英語における倒置は基本語順であるSVO語順に従わない特殊な語順という位置付けがなされており、SVO語順を前提とした「意味順」において想定されている「だれが」「する(です)」「だれ・なに」「どこ」「いつ」という「意味の順序」からも逸脱した現象である。したがって、「意味順」を用いて倒置語順の分析を通時的に行うことで固定語順言語である現代英語を念頭において構築された「意味順」の応用性を検証するのみならず、英語史の視点を英語教育分野に活かすという波及的な効果を生み出すことを目標とした。

その点において、古英語から現代英語にいたるまでの **there+BE** 動詞からなる、いわゆる **there** 構文を「意味順」を用いて分析したことが挙げられる。現代英語の **there** 構文における **there** は形式的な主語としてみなされるが、古英語期において **there** 構文は倒置語順の一種であった。また、存在を表す **there** 構文は古英語期から存在していたことが知られている（引用文献⑦）。しかし、古英語においては **there+BE** 動詞からなるすべての構文が存在文だったわけではなく、以下の下線部のように **þar** ‘**there**’が具体的な「場所」を指示していると解釈される言語事例も観測されたことを指摘した。その上で、「意味順」を用いて、指示的な意味を持つ **there** を「どこ」に置くことができるとして下表のように可視化した。

[...] swa þæt [...] beo an scip flotigende swa neh þan lande swa hit nyxt mæge & þar beo an mann stande on þan scipe & [...]
 ‘... so that ... and a ship is floating as close to the land as it might closest be, and a man stands on that ship and ...’ (Anglo-Saxon Chronicle, MS. A, 1031.1; 現代語訳は引用文献⑧に依る)

α	だれが	する・です	だれ・なに	どこ	いつ
& ‘and’				þar ‘there’	
		beo ‘is’			
	an mann ‘a man’				
	∅ ‘who’	stande ‘stands’		on þan scipe ‘on the ship’	

ところが、**there** 構文は時代が経るにつれて、**there** が本来有していた「場所」という語彙的な意味が薄れてしまい、内容語から情報の導入を行う機能語へと文法化が進行し、形式的な主語へと発達した事例（引用文献⑨）と考え、以下のような言語事例における **ther** ‘**there**’は「意味順」では「どこ」ではなく「だれが」として下表のように可視化した。

Whilom, as olde stories tellen us, Ther was a duc that highte Theseus;
 ‘Once, as old stories tell us, there was a duke who was called Theseus.’ (Canterbury Tales, The Knight’s Tale)

α	だれが	する・です	だれ・なに	どこ	いつ
	Ther ‘There’	was ‘was’	a duc ‘a duke’		
	that ‘who’	highte ‘was called’	Theseus ‘Theseus’		

このように、「意味順」は現代英語の SVO 語順を前提とした枠組みではあるものの、歴史的な英語の分析にも応用し得ることを実証した。波及効果として、教育文法である「意味順」を用いて歴史的な英語を分析する利点は、英語の学習過程で「意味順」に慣れ親しんだ英語学習者が現代英語と比較しながら過去の英語に触れることができる点にあると主張した。そして、「意味順」を活用しながら歴史的な英語に触れることで、現代英語に対するより深い理解が得られることが期待できると結論づけた。

(2) 単著論文『古英語殉教者録』における節レベルを超えた定型性（全 26 頁）は 2021 年に出版が予定されている。本論文では、『古英語殉教者録』における談話の展開と語順に関する考察を行った。殉教エピソードには共通する五つのパートがあり、それぞれにおいて語順に関わる定型表現が確認できることを指摘した上で、共通の特徴について記述した。そして、それぞれのパートにおける定型表現は殉教エピソードという談話単位においても定型性を担う役割を果たしていると結論づけた。定型性を談話に見られる語順パターンの慣習化という観点から分析を行うことで、従来考えられていた文・節を超えた談話単位での定型性を明らかにした。

<引用文献>

- ① Pintzuk, Susan & Ann Taylor. 2006. The Loss of OV Order in the History of English. In Kemenade Ans van & Bettelou Los (ed.), *The Handbook of the History of English*, 249–78. Oxford: Blackwell Publishing.

- ② Los, Bettelou. 2009. The Consequences of the Loss of Verb-second in English: Information Structure and Syntax in Interaction. *English Language and Linguistics* 13(1), 97–125.
- ③ Los, Bettelou & Gea Dreschler. 2012. The Loss of Local Anchoring: From Adverbial Local Anchors to Permissive Subjects. In Kemenade Ans van & Bettelou Los (ed.), *The Handbook of the History of English*, 859–72. Oxford: Blackwell Publishing.
- ④ Kemenade, Ans van. 2012. Rethinking the Loss of Verb Second. In Nevalainen Terttu & Elizabeth Closs Traugott (ed.), *The Oxford Handbook of the History of English*, 822–34. Oxford: Oxford University Press.
- ⑤ Brinton, Laurel J. 2015. Historical Discourse Analysis. In Deborah Tannen, Heidi Hamilton & Deborah Schiffrin (ed.), *The Handbook of Discourse Analysis*, 222–43. Malden, MA and Oxford: Blackwell.
- ⑥ Tajino, Akira. 2018. MAP grammar: A systemic approach to ELT. In Akira Tajino (ed.), *A New Approach to English Pedagogical Grammar: The Order of Meanings*, 9–25. New York: Routledge.
- ⑦ Breivik, Egil Leiv. 1990. *Existential There: A Synchronic and Diachronic Study*, 2nd ed. Oslo: Novus Press.
- ⑧ Swanton, Michael. (ed.) 1996. *The Anglo-Saxon Chronicle*. London: J. M. Dent.
- ⑨ 保坂道雄. 2014. 『文法化する英語』 東京：開拓社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田地野彰、金丸俊幸、川原功司、高橋佑宜、笹尾洋介、奥住桂、藤木克哉、山田浩、佐々木啓成、村上裕美、加藤由崇、渡寛法、桂山康司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 明日の授業に活かす「意味順」英語指導 理論的背景と授業実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------